



中里介山全集

第十卷

筑摩書房

中里介山全集第十卷

昭和四十六年五月二十七日発行

著 者 中 里 介 山

発行者 竹之内 静雄
東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行所 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一—九一

電話 東京(281) 七六五一(代表)

振替 東京 四一 二三

印刷 株式会社 厚徳社

製本 株式会社 矢島製本所

落丁・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0393 (製品) 71710 (出版社) 4604

目次

新月の巻

恐山の巻

宇宙を創造する者（伊藤銀月）

『大菩薩峠』の男たち（樋口謹二）

解題（十）（南波武男）

函·装画·横山大観

大菩薩峠

第十卷

新月の巻

一

とめどもなく走る馬のあとを追うて、宇治山田の米友は、野と、山と、村と、森と、田の中を、かなり向う見ずに走りました。

しかし、相手は何をいうにも馬のことです。さしもの米友も、追いつくのが当然でしたが、そうかといって、そのまま引返す米友ではありません。ことに右の放たれた馬には、長浜で買入れた家財雑具はいうに足らないとしても、たつたいま両替したばかりの何千というお金が、確実に背負わせられている。金額の多少を論ずるわけではないが、ことにあのお嬢様が、この米友を見込んで用心棒を依頼してある、その責任感から言っても、追及するところまでは追及せずにはおられないでしょう。

それはそうとして、米友もまた心得たところもある。奔馬というものは、前から捉えるに易くして、後ろから追うにはこの通り骨だが、そうかといって馬というやつは、蝶蝶トンボの類と違って、どう間違っても空中へ向けて逃走することはない。天馬空を往くという例外もあるにはあるが、通例としてはせいぜい地上を走るだけのものである。ああしてせいぜい地上を走っているそのうちには前途から誰か心得のある奴が出て来て取捕まえてくれるか、そうでなければ馬め自身が行詰るところまで行つて、立往生するか、顛落するかよりほかはないものだ——ただ、往来雑沓の町中でもあるという、他の人畜に危害を与えるおそれもあるが、その点に於てこういう野中では安心なものだ——という腹が米友にあるから、焦りつつも、いくらか余裕をもって走ることができるのです。

ところが、案に相違して、なかなか前途から、心得のあ

りそんな奴が飛び出して取抑えてくれそうもなし、何かこの奔馬をして、行きつもらせるところの障物物といったようなものも容易にないのであります。

ついに一つのやや大きな川原中へ飛び出してしまいました。

「川へ来やがった」

川原道を、ついにこの馬がガムシヤラに走るのです——その川原の幾筋もの流れをむやみに乗切って、ずんずん飛んで行く馬は、まだ石田村の門前でひっぱたかれた逆上^{のぼせ}が下りないで、お先まっくらがさせる業なのでしょう。

やむことを得ず、米友もつづいて川原の中へ飛び下りました。

逆上し切ってお先真暗なことに於て、奔れ馬ばかりを笑われませんでした。幾分の余裕を存して追いかけて来たつもり^{のぼせ}の米友自身すらも、この時分はかなり目先がもうげんじていました。

「わーっ」

という喚声^{おどろ}が、行手の川の向う岸から揚って、そうしてバラバラと礫^{れき}の雨が降って来た時は、米友が、屹^まとなつて向う岸を見込むと、その鼻先へ、今の今までまっしぐらという文字通りに走って来た放れ馬の奴が、不意に乗返して来たのですから、その当座の米友は土用波の返しを喰ったように驚いたが、その辺はまた心得たもので、

「よし来た！」

何がよし来た！ だかわからないけれども、今まで追いかけても追いかけても追いかけて足りなかった目的物が、今度は頼みもしないのに、自分で折返し畳み返して来たのですから、勿怪^{もつげ}の幸いと言え言うものの、この際、米友でなければ、たしかに引返し馬のために乗りつぶされてしまったことは疑うべくありません。

そこを、心得たりと身を沈めて、轡^{くら}づらをしっかりと取った米友、

「どう、どう、どう——しっかりしやがれやあい」

米友はどの人格者に握られた轡ですから、何のことはありませんでした、その途端に、馬の逆上^{のぼせ}がすっかり引下つたと見えて、大きな目もパツカリと見えるようになってみると、疲労そのものが一時に露出したらしく、馬相応の、嵐のような息をついて立ちすくみの体です——ここで米友は完全に奔馬を取捕まえることの目的を達しました。

その目的だけは完全に達したけれども、前後左右の分別までがハッキリと手に取れてゐるわけでもなく、頭にうつっているわけでもないのです。

第一、今までガムシヤラに走り続けていたこの馬のやつが、今ここへ来てどうして不意に折返して来たか、前途に心得ある人が出て来たわけでもなし、広い河原で、これぞといつて障物もありはしないのに——こいつがここで不意にあと戻りをやり出した理由と原因とは、よくわかつていないのです。しかし、その理由と、原因をわざわざと探

し求めるまでもなく、米友の身の周囲に降りそそぐ石礫が、とりあえずこの不穩を報告する。

二

片手で馬の轡を取りながら、そうして、石の飛んで来る前岸を見込むと、さても夥しい人出。

向う岸の土手の全部が、ほとんど人を以て埋っている光景を、米友がはじめて見ました。

「やあ、大変な人だな、蟻町のようだ」

石の礫は、その夥しい人類の中から降って湧いて来ていることに相違ないが、この夥しい人類が、いつのまに、何のためにここへ現われたのだから、それはひとまず米友の思案に余りました。

なるほど、荒れ馬の飛んで来るのは危ない。それ故に村の人が警戒を試みるのもよろしい。だが一頭の家畜のために、これだけの人数が繰出して来るとは——第一、馬がこの川原へ来るか来ないうちに、その危険をおもんばかつて、これだけの人数をかり集め得たとすれば、その人寄せは人間業ではない。

しかしまた、他に目的あつてここに待構えているんなら、何かその目的物がありそうなものだが、あいつらの面という面、目という目は、みんなこつちばっかりを見合せていやがる——だから、この一匹の馬のためにあの人数が繰出

されたと見るよりほかはねえ、大仰なこった。

おやおや、竹槍を持つてゐるぜ、竹槍を林の如くあの通り揃えて持つてゐる。こいつは驚いたな、タカが一匹の放れ馬のために、危ねえ！

クルクル眼を廻して、驚いてながめてゐるうちに、礫の雨が絶えず降つて来て、同時に向う岸で口々に、おれたちに向つて何かを罵りかけてゐるようだが、ガヤガヤして何のことだか聞きとれねえ。

米友としては、奔馬追及の目的は完全に達せられたことだし、たとい、彼等が無理無体で礫の雨を降らしたところで、ここぞなにも、好んで、宇治山田の網受けの芸当をしてお目にかける必要のないところですから、その飛んで来る石の雨は片時も早く避けた方が賢いと思慮したものですから、おもむろに馬の口をとつてこちらの岸へ戻つて来ると、「発止！」これはまた、どうしたことでしょう、今度は戻つて来る方の岸から、礫の雨が飛んで来ました。

「こいつは驚いた」

米友は馬の口をひかえて、戻り来る岸の上を見ると、そこにも土手の上いっぱい、芋の子を盛つたような人出です。それが口々に罵つてゐる、竹槍を持つてゐる、米友と馬とをのぞんで石の雨を降らしかける、それは前岸の光景と全く同じことです。

自分ながら落着いたつもりだが、まだ血迷つていた。向きをかえたつもりが、実はもう一ぺん廻り過して同じ方

向に向いちゃったか。あわて者が馬へ逆さに乗って尻尾を見て、「おやこの馬には頭がねえ」と言ったが、乗り直して頭を見て、「尻尾もねえ」と言ったという笑い噺がある。そうでなければ大きな鏡仕掛で、あちらの幻像を、こちらへがんどり返しにうつし取ったものと見なければならぬが、事実上、米友がどちらを向いて見ても、両岸が同じ光景だものですから、一時、どうしても、そこに馬の口を取りながら、立ちすくみの姿勢をとらざるを得ませんでした。「わからねえ。わからねえ奴等だ」

それは、馬が駆けて行く方が用心するのは当然であるとしても、その用心が情力^{ぢやうりき}かなにかで文句を言い、石の一つも投げてみようという手ずさみは、まあわかつているが、もうこの通り、馬も取鎮めてしまつて、そうして穩かに曳いて帰ろうてえのに、その引返した方の奴が、悪口を言つてこっちへ石を投げかけるてえのは、わからねえ理窟^{りこく}ぢやねえか。

こういう人氣の土地が知らねえが——こんなことは初めてだ、一匹の馬のために、まあ、見るがいい、後から後からとあの人は、村方総出だ。

おやおや、竹槍を持ったのが、バラバラこっちへやつて来るぜ。

また、向う岸からも竹槍を持った奴が、バラバラとこっちへやつて来るぜ。いったいどうしようてえんだ、このおいらと、馬とを、両方から挟み討ちにして、あの竹槍で突

つつき殺さずにや置かねえという見か——それはいいよわからねえ。第一、この馬とおいらが、何を悪いことをしたのだえ。

馬はやみくもに駆けたばかりだ、おいらはそれを追つかけて来たばかりなんだ、老人子供^{らんどこども}の一人にだって、怪我あさせたわけぢやあねえんだ。村を騒がせて済まなかったといえれば済まなかったに違えねえんだから、その点はおいらだって詫^わびをしろと言えばしねえとは言わねえよ。なにもこっちも好きこのんで、馬を飛ばしたわけぢやあねえんだ、馬が何かに驚いて飛び出したんだ、何に驚いたんだか、そんなことはまだ原因をたしかめる暇もなく、おいらはこうして追いかけて来たんだが——なんにしてもこっちに責任のある馬には馬なんだから、詫びろと言えば詫びらあな、あやまれと言えばあやまつてやらあ——それをお前、何もここに一言も言わさねえで、両岸から挟みうちにして竹槍で突つつき殺そうたあ酷過^{こくわ}ぎる！

タカが一頭の馬の畜生のごぢやあねえか——まるで、これぢや戦^{いくさ}だ——まさかこの馬が千両からの金を積んでいることを知つていて、それを取りてえから、ああして人数を集めたわけぢやあるめえ。そうだとすれば、村中が心を合せて切取り強盗を商売にしているようなわけのものだが、今時そういう商売^{あきうり}の村というのはあるめえ。第一、この馬が千両からの銭金^{ぜにがね}をつけているかいねえか、それまで見きわめちやいめえがな。

おやおや、来るよ来るよ、本当にやって来るぜ、あの通り若い奴が、竹槍を持って、こっちの岸からも御同様。さあ、もう仕方がねえ、こうなったからはこっちも了見をしなくちゃならねえ。

米友は川原の真中で、だんだんを踏みました。同時に、両方の岸から、すさまじい鬨の聲が起りました。

竹槍をしごいた両岸の先陣五六名ずつが、その声に煽られて、奔馬のような勢いで、米友をめぐがけて——事実、米友としては、そう見るよりほかに見ようがない——両方から殺到し来るのです。

こうなると米友は、もはや、ぢだんだんだけでは許されない。

もういやです。米友としてもこんなところでまたしても武勇伝は現わしたくはないのですが、実際、身に降りかかる火の粉は払わなければならぬ。払って置いて相当の弁明が聞かれなければ、もうそれまで——そういう覚悟をきめることには未練のない男です。

そこで、足場を見計らってお手のものの杖槍を二三度、素振りをしてみてからに、懷中へ手を入れると、久しく試みなかった菱の実のような穂先を取り出して、しっかりとその先を食いこませたものです。

その時また、わあっ！ と両岸で山の崩れるような鬨の聲。

三

全く理不尽千万な、乱暴至極な、前後から一応の弁明もさせずに、竹槍の槍ぶすまを作って、米友一人と、駄馬一頭とをめぐがけて襲い来る暴挙。これは甲州街道の雲助でさえもあえてしなかったところの兇暴です。しかし、事ここに至っては、いかにことを好まない米友であるにしても、勢い決死的に応戦の覚悟をきめること以外には、正当防衛の手段は無いのです。

躍り立つた米友は、その応戦の準備をしている途端に、なんだか急に、風向きが変って、予想の当てが外れたようにも受取れる——それは、自分と馬とにばかり向って来るものと思いきっていた両岸の竹槍の槍ぶすまが、決して引返したというわけではないが、ある地点へ来ると、明らかにその槍先の当てが違っている、向きがそれているということを米友が認めました。

当てが違っており、向きがそれているとしてからが、河原を真中にして、川原の両岸の土手から同じように進んで来ることは少しも変化はないのですが、その槍先が——つまり、米友と駄馬との焦点に向ってのみ集中し来るものとはっきり信じていたのが、途中にして、そうでなかったということが明らかにわかったのです。

ある地点で、米友の的を外してしまったそれからは、中

に何も置かず、川と川原だけで、そうして、兩岸の竹槍と竹槍とが、対陣の形によって、おのおの両方から取詰めて行っていることを米友が明らかに認めました。

「なあーんだ」

と、それを知った瞬間に、米友が思わず力負けがして息を抜いたのは、べつだん事柄を軽んじたわけでもなければ、案外なばかばかしさから、嚙んで吐き出したというわけでもない。

つまり、この火の粉は、自分の身のみ降りかかるものと信じきって構えていたのが、実はわが身に降りかかるのではない、ということを知って、個人的に一安心したということに止まり、事件そのものの性質の危険性が、それで解消したというわけでは決してないことを認めると共に、一旦「なあーんだ」と言って、ばかばかしそうに力を抜いた米友が、再び別な用心を以て構えを立て直さないわけにはゆかなかったのです。それというのは、被る人が誰でもあるうとも、火の粉は火の粉です。火の粉が自分の身の上へ落ちて来るのぢやなかった、ということに認めて安心したのはいいが、それが人の身の上なら落ちかかって来てもいい、という理窟にはならないのです。

充分の危険性あるものは、危険性あるものとしてなお存在し、それが自分の頭を外れたとは言いながら、他人の頭へなら落ちてもかまわない、という論法にはならないのであります。

兩岸の竹槍の槍ぶすまは、米友を焦点とすることから明らかにそれ出したけれども、その相手が消滅に帰したというのではなく、手取早く言えば、今度は米友とその馬とを抜きにして、ひたひたと竹槍同士の對抗の形となって、ジリジリ押しをはじめています。

「なあーんだ、ここでも戦ごっこがはじまってやがる」と米友が冷笑しました。道庵先生が関ヶ原で演じた模擬戦を、ここでも誰かが模倣している。

面白くもねえ——と米友がさげすみました。本来、米友は、道庵がするような芝居気たつぷりがあまり好きではないのです。紙幟を押立て、模造大御所で納まり返って、あたし金銭と時間をつぶし、いい年をした奴が、戦争ごっこをしてみたところで、何が面白れえ——

子供ぢやあるめえし——と言って、米友がさげすむのも無理はないのです。道庵先生は、本来ああいうことが好きに出来てるんだ。つまり病なんだ。病では死ぬ者さえあるんだから、どうも、あの先生に限って、仕方がねえと諦めてるんだが、病でもなんでもねえ、いい年をした奴等が、こう大勢寄り集まって、あつちでもこつちでも戦争ごっこをするたあ、呆れ返ったものぢやねえか。

稼業を休んでさ——年に一度か二度のお祭なら仕方がねえが、見たところ、これは決してお祭ぢやねえんだ。

ちえッ——

米友は、冷笑しながらそれを見ていると、事の体そのも

のは全く冗談でもなければ、いたすらでもない、好きでやっているわけでも、病で狂っているわけでもない、まして、お祭騒ぎでなんぞあるべき余裕や賑わいはちつとも見えないうのみならず、明らかに殺氣そのものが紛々濛々と湧いているのです。

四

今や、最初に米友をめざして突き進んで来た兩岸の十数名は、それは先陣でありました。

先陣は勇者中の勇者のすることです。米友を的としての槍先はこのとき全くそれが、槍と槍とが川原の真中で出逢ったところですから、白兵戦が演ぜられるのかと思うとそうでなく、ある地点へ行くと、また急角度に槍先が變つて、今度は両方の先陣とも、川をさしはさんで並行線になつて、まっしぐらに駆け登つて行くところを見ると、そこに水門口があります。

一方は井堰。

ちょうど、山崎の合戦で、羽柴軍と明智軍とが天王山を争うたように、この両箇の先陣が、その水門口をめがけて我先にと競いかかる有様が、米友にハッキリと読めました。「はゝア——水門だな」

今や明らかに両軍争奪の的が、米友及びその馬であることは消滅すると共に、新たなる目的物の存在がわかりまし

た。

目的はあの「水門口」の奪い合いだということは、馬鹿でない米友の頭にかつきりとわからないはずはありません。「よくあることだ！」

それは芝居気たつぷりな模擬戦でもなければ、見得や慰みでやるお祭でもない。好きと病で、稼業を休んで、ああしているわけではない。全くの戦争だ、いや、戦争以上の生活の戦いだ。

水争いである——よくあることだ、ひでりの年には。

水を取ると取らないとは、二つの村の収穫に関係するのである。一年の収穫は、百姓の生活の全部に匹敵するのである。彼等兩岸の村々の者が、その収穫のために水を得ようとするのは、その生活のために生命を守ろうとするのと同じことだ。

必要だ——道庵流の模擬戦とは事が違つて、現実在即した生死の争いだ、笑いごとや、冗談ごとちゃねえぞ！

米友がそうさつてくると、おのづからまた力瘤が満ちて、ちんだんだが川原の砂地へ喰い入りました。ここぞ、今、生活の白兵戦が始まるのだ、さあ後陣が続く続く。

なだれを打って、後ろから人数が繰出して来たぞ。

やあ、こいつは——川原いっぱいが死人の山になるのだ、氣の毒だなあ——

どっちにも理窟はあるだろう、どっちも生死の境だからこうなつたには違えねえが、何とか捌きはつかねえものか、

両方ともに生きたいがために水が欲しいんだ、それなのに、両方は死人の山を築いたんでは何にもならねえではないか、意地を張るというやつは、得てしてこんなもんだが、さあ、こいつはいけねえ。

おいら一人を目の敵にやつて来たなら、まだ始末はいいが——この多勢で入乱れて混戦となったら手はつけれねえ。

困ったなあ、弱ったなあ、ちえっ！

米友は齒齧みをして、じりじりして、眼をクリクリさせて、ぢだんだを幾つも踏んでみましたけれど、足がいよいよじりじりと砂地の中に喰い入るばかりで、全く手のつけようも、足ののばしようもないことを覺らずにはおられません。

今や双方の先陣が、水門口の天王山を双方から取詰めて、竹槍の先が火花を散らして、兩岸に血の雨の洪水を切つて落そうとする——瞬間に、いつ、どこから、いつのまに身を現わしたのか、その天王山の中央の水門の上へ、すつくと身を現わした一つの人影を米友が認めました。

それは、米友が認めたばかりではありません、万人ひとしく注意の焦点でありましたから、誰ひとりとして、その一個の人影を認めないものはなかったらうと思われまふ。それのみならず、認めるには、ちょうど都合のいいように、地の利もよかつたし、第一、その人影そのものの風采が、かつきり、あたり近所を劃しておりました。

というのは、その一つの物形だけが竹槍席旗の兩岸の人民たちと違って、鮮かにさむらいのいでたちの、しかも寛濶な着流しで、二本の大小を落し差しにしている風采そのものが示します。

不意に現われたこの一個の人影が、さしもにいきり立った竹槍組の先陣の氣勢をも大いに緩和したのか、妨害したのか、とにかく、決死的に勢い込んだ先陣の槍先が鈍ったことは確かであります。

米友も、眼を拭つてそれをながめました。米友の立っている地点からは、かなり離れていることですから、さながら人形芝居を遠見している如く、影絵の拡大を目中見せられている如く見えるのですが、気のせいかな米友の眼で——遠目にどうもそこへ現われたさむらいが、見たことのある

——と言っても古い昔のことではない、最近に、そうそう、長浜の湖辺で、釣を垂れていたあの浪人者——あれに似ているように思われてなりません。どうも物言い、恰好、それだ。それだとすれば、いつ、どうしてあすこへ駆けつけて来たのだらう、こっちの岸から駆けて行つたとも見えななし、あつちの岸から走りついたらとも気がつかなかったが——さては隠れていたな、あの水門の蔭あたりに、びつたりと身をひそめていたのだな。うむ、そうだ、こういうことが起るだらうとかねて心配していたものだから、その時の用心にと、あの水門の蔭あたりに隠れていて、それから双方の仲裁にかかろうという段取りだ。なるほど、そうあ

りそんなことだ。

この仲裁ぶりが見ものだなあ——米友はじりじりしながら、固唾を呑みました。

五

しかし、仲裁ぶりを見るといったところで、ここは遙かに隔たっているから、言語はむろん聞えず、ただ遠距離から活動写真を見ていると同様で、彼等の動作だけがわかるのみであります。しかし、動作だけにしながら、銀幕の上に持廻りのすれからし物を見せられると違って、白日の下に、カッキリと実演によって見せられるのだから、要領を得ることは手にとると同様です。

双方から勢い込んだ竹槍の先陣が、この水門口のところ浪人姿のさむらいに支えられました。浪人姿のさむらいは、手ぶり、身まねを以て彼等と懇々と理解を説いているらしい、その動作を見ると、言葉はむろん聞えないけれども、かなり歯ぎれのよい弁舌家であるらしい。

或いは叱り、或いは教え、或いはなだめ、或いは口説いている様子は、活動俳優そのものと違った真剣味がありますから、自然、米友も身を入れて見ていることができるのであります。まして当面、その理解を聞き、身ぶりを受けている人数にとっては、なお一層身に沁みる程度が深いと見えて、さしも意気こんだ竹槍の先陣たちも、おのづから、

いくらかずつ意気込みが緩和されて行く気分も、米友の方へ打って響くようにうつります。

そのうちに、双方から続々と後陣が詰めかけて来る。先陣の氣勢によって、それもみな幾分か殺気が緩和されて来りつつあるものようです。

で、竹槍、鉾、鋤の類をはじめとしての得物は、それぞれ柳の木に立てかけられたり、土手の上に転がされたりして、双方が素手で無事に入り交つて、といつても中心に絶えずその理解を説いている浪人姿のさむらいを置いて、おのおの主張を口舌で取交しはじめていることも、ハッキリわかりました。

つまり、要領はこうなんです、右の浪人姿のさむらいが現われて、

「君たち、そう一途に得物を持って殺気をたててはいかんぢやないか、水が切れたからと言って、血の雨を降らすなんぞは愚かな儀ぢや。ぢやによって、一応双方から委員を選んで、評議をこらしてみちやどうだね。本来、責任は天にあるのぢや、天が雨を降らせてくれないのだから、恨みがあれば天へ持つて行くべき筋ぢや。喧嘩をするとすれば、天を相手に喧嘩をしなければならぬものを、それを人間同士がなすり合つて、血の雨を降らせようということはいかん。そこでぢや、この水門の水を、穏かに、相談つくで、適度に分配することにしちやどうだ——たとえば、朝の何時までは甲の村で使用し、夕方の何時からは乙の村へ放流

するといふようなことにでも、相談づくでやつてみちやど
うだ——いくら君たちが竹槍、蓑、旗で騒いでみたところで、
この水量が一滴でも増加すべき筋合いのものではない。そ
こで双方委員を選んで、おたがい歩み合いをいたし、相
当限度まで辛抱すべきところは辛抱するという手段を執る
のが賢い。そうして、その余力を以て、両方の村々が仲よ
く相一致して、雨乞踊りでも催して、天に祈り、人を喜ば
してみちやどうだ、そのうちには何か効験がないというこ
ともあるまい」

右のような理解を説いて聞かせているとする、そうする
と両岸のいきり立った、逸り男もそれに感化されて、

「なるほど、旦那のおっしゃることは尤もだ、お天道様が
雨をふらせて下さらねえからといって、人間が血を流すの
は、よくねえことだ、なんとか総代を選んで談合がぶてる
ものなら、そりゃはあ、談合をぶつに越したこたあねえ」
というような空気に傾いたらしい。そこを右のさむらいが、
「では、ともかく総代は君たちの方でおのおの五人なり十
人なり、適当に選挙し給え、仲裁役は不肖ながら拙者に任
せてもらえまいか」

という段取りになって、異議なし異議なしでそれから浪人
姿のさむらいが、堤上をこなたの岸に向つてそろそろ歩み
出す。それを囲んで、双方の委員候補者たちと見えるのが、
ゾロゾロとついて来る。後ろにつづく後陣の大勢も、こう
なつてみると殺気は解けたが、そうかと言って、このまま

すんなりと解散する気にはなれない。簡単に追いかえすわ
けにはなおさらゆかない。そこで、さむらいを中心に、立
てた委員総代候補者連のあとをくつついて、この大多數が
ゾロゾロと行くところまでは行こうという形勢になりまし
た。

その形勢で見ると、今までは火花を散らそうとした二つ
の勢力が一つに合流はしたけれども、さてまた、この合流
した勢いのきわまるところが問題でなければなりません。
一時の合流は見ただけで、それがために大雨がにわかに到
つたというわけでもなし、双方を納得せしむべき解決条件
が見出されたというわけでもないらしいから。

これからこの浪人に率いられて、どこかへ行くのだ。ど
こぞへ行つて、改めて熟議を凝すものに相違ないが、どこ
へ行くつもりだろう——そんなことまで、米友が想いやつ
ているうちに、早くも右のさむらいを先頭にして、この群
衆の姿は全部村の中に隠れてしまいました。

そこで、川原の中に止まる者は、はや宇治山田の米友と、
両替の駄賃馬ばかり——それも、いつまでこうしていなけ
ればならぬはずのものではない、ともかく、市が榮えてみ
ると、自分たちは、自分たちとしての引込みをつけなけれ
ばならない。

かくて、米友は、おもむろに馬を曳いて、川原の中から、
こちらの堤の上へのぼって、飯橋のある柳の大木のあると
ころまでやって来たのであります。が、そこで米友が、ま